埼玉県スポーツ少年団指導者意識(実態)調査

◆調査目的と実施まで

平成 27 年第２回本部員会において、団員増加策に関する取り組みを指導者協議会の立場で検討するように要望がありました。

これを受け、団員増加策について、どこに糸口をみつけるか模索する中で、まずは、なぜスポーツ少年団が選択されないのかという理由を探ることから始めました。人口減少やスポーツ環境の選択肢増加など、様々考えられる中で、勝利至上主義の指導等が少年団活動の妨げになっているのではないかとの見地にたどりつき、指導者へ勝利至上主義についてどのように考えているか実態を調査することにしました。

効果的な調査方法について検討を重ね、平成 28 年第３回運営委員会において全県的に指導者を対象としたアンケートを実施することを決定しました。

設問から指導者の本音、資質、指導現場の様子、背景といった実態を浮かび上がらせ、全体の傾向をつかむ狙いから、意識(実態)調査とし、実施をいたしました。

◆調査対象

登録指導者(各単位団１名以上)とする。

性別、年来及び経験年数は問わない。

◆調査期間

平成 29 年１月から２月末日

◆調査形式

アンケート　№.１～13(選択式)　№.14～18(記述式)

◆調査結果及び考察

800 件近い回答を得ましたが、電子媒体による回収を予定しておりましたところ、多くが手書きまたは PDF での提出であったため、運営委員で手分けしてデータ化する入力作業から始めました。

分類整理にあたり多くの時間を費やすことになりましたが、なるべく内容を忠実に伝えることを念頭に丁寧に作業を進めました。

選択式の項目はグラフ化することで視覚的にわかりやすくしました。記述式の５項目については共通点が多いものごとにまとめ、そのデータを基にさらに考察を重ねる作業をしました。この結果をホームページに掲載し、指導者、母集団、団関係者の皆さまにご覧いただき、よりよい指導とは何かを考えて頂ければ幸いです。

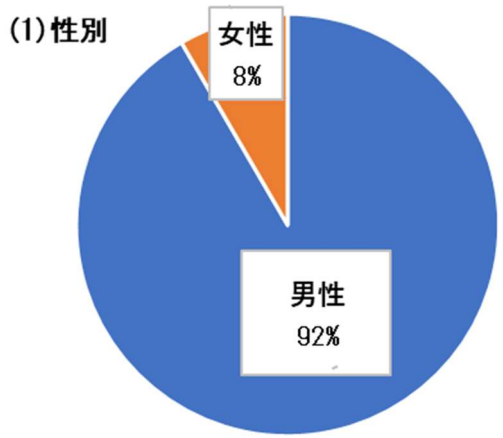
2019 年 5 月 15 日

埼玉県スポーツ少年団
指導者協議会　委員長　兵藤　明子

（1）性別

男性　689 名
女性　 63 名

女性の回答率は
男性の１割にも満たない

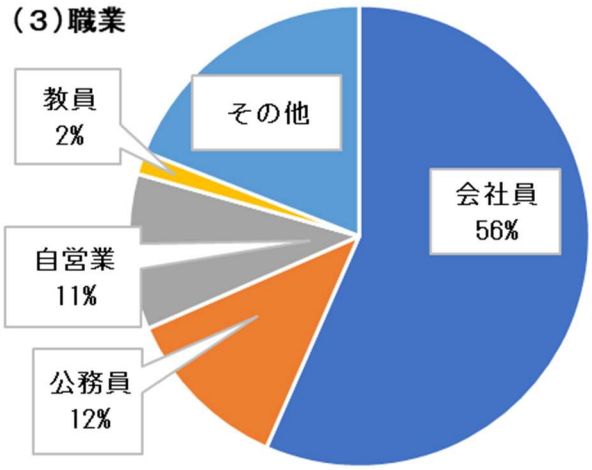


（2）年齢

回答者の平均年齢　51.7 歳
※平成 29 年１月１日現在

（3）職業

ア　会社員　425 名
イ　公務員　89 名
ウ　自営業　82 名
エ　教員　12 名
オ　その他　143 名
※その他の職業は別記１参照



（4）所属市町村　別記２参照

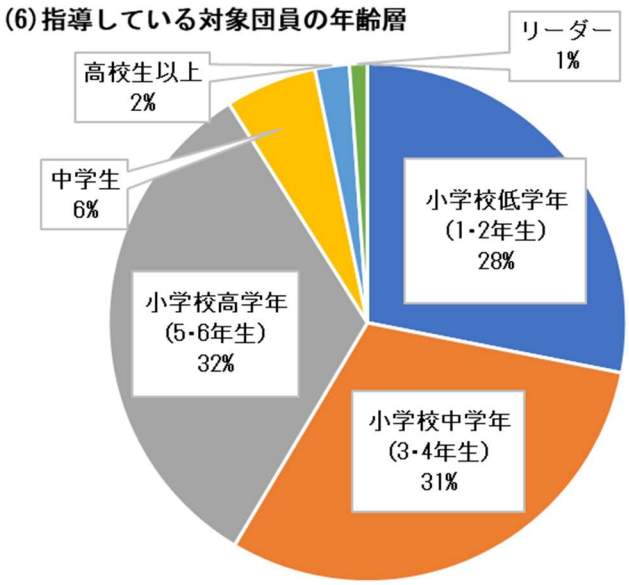
（5）指導歴　平均年数　16.0 年

ベテラン勢の回答が多く、各団の代表や、中心的な役割を果たす指導者が調査に協力をしているようにとれる。

（6）指導している対象団員の年齢層　（複数回答可）

ア　小学校低学年（１・２年生）
イ　小学校中学年（３・４年生）
ウ　小学校高学年（５・６年生）
エ　中学生
オ　高校生以上
カ　リーダー

スポーツ少年団活動の特徴をとらえ圧倒的に小学生が多い。
小学生のア、イ、ウの数字が横並びなのは、この設問は複数回答が可能なためで、全学年を見ているという状況も見えてくる。



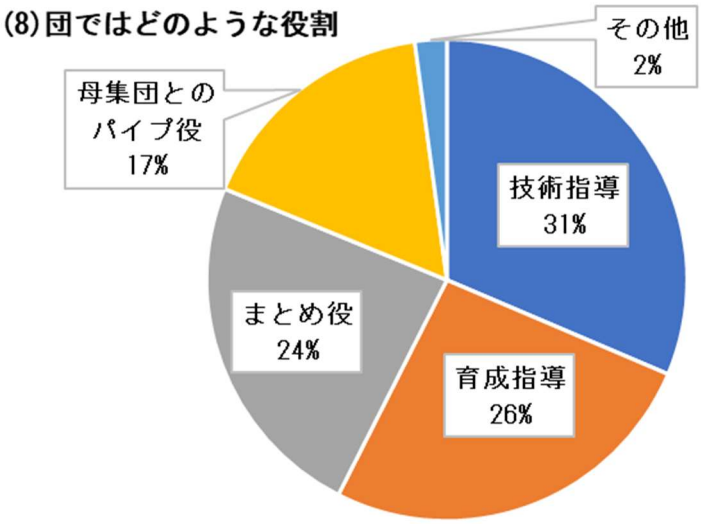
（7）指導種目

ア	サッカー	200 名	イ	野球	204 名
ウ	バスケットボール	126 名	エ	空手道	36 名
オ	バレーボール	68 名	カ	剣道	38 名
キ	柔道	14 名	ク	ソフトテニス	14 名
ケ	ソフトボール	17 名	コ	バドミントン	9 名
サ	卓球	1 名	シ	拳法	1 名
ス	複合種目	2 名	セ	その他	26 名

（8）団ではどのような役割を担当していますか　（複数回答可）

ア	技術指導	614 名
イ	育成指導	510 名
ウ	まとめ役	464 名
エ	母集団とのパイプ役	326 名
オ	その他	42 名

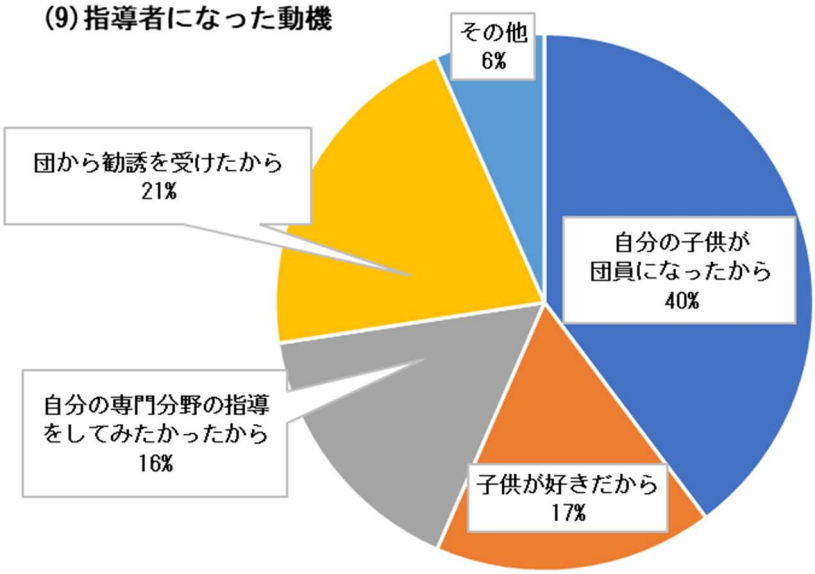
一人の指導者が、技術から育成、コーディネート的なことまで一手に引き受けている状況が見える。



（9）指導者になった動機は何ですか

ア	自分の子供が団員になったから	493 名
イ	子供が好きだから	208 名
ウ	自分の専門分野の指導をしてみたかったから	199 名
エ	団から勧誘を受けたから	258 名
オ	その他	82 名

自身の子どもの入団をきっかけに指導者になるケースが多い。
積極的な参加により安定した運営が期待できる。



(10)指導者として自己研鑽を行っていますか。(直近３年間について)

ア　スポーツ少年団や体育協会などの主催する研修会、講習会　262 名
イ　雑誌や専門誌などを読んだ　373 名
ウ　インターネットで情報を得ている　335 名
エ　その他　71 名
オ　行っていない　70 名

多くの方が競技団体の指定する研修に参加するほか、雑誌やインターネットなどから情報を得ていることがわかった。
インターネットやメディアでの情報収集は、信用できるものであるかどうかを判断するスキルも必要とされる。

(11)指導日数と指導時間

指導日数(週)　平均値　2.3 日　　日常活動時間　平均値　4.9 時間

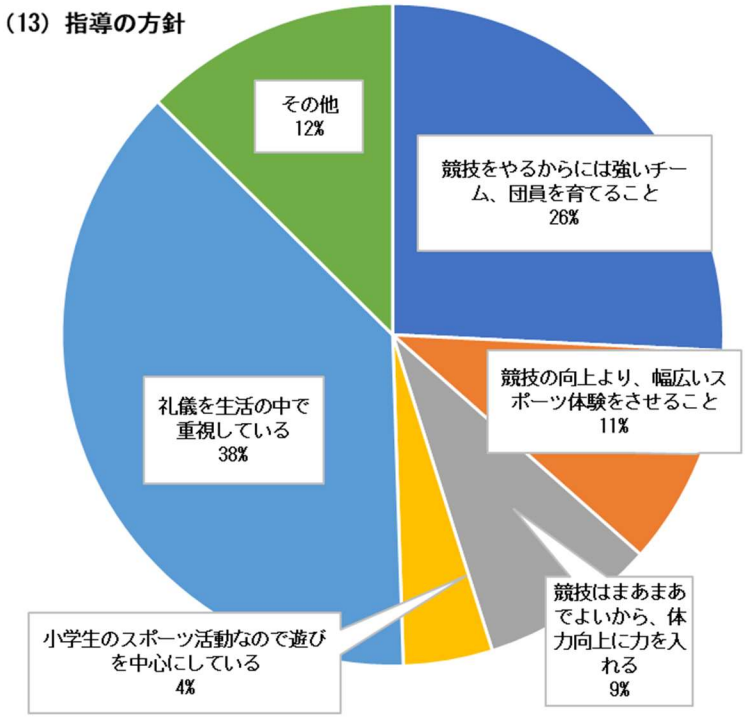
(12)理想的な活動日数、時間はどのくらいがよいと思うか

指導日数(週)　平均値　2.7 日　　日常活動時間　平均値　4.9 時間

理想的な活動日数と活動時間については、(11)と大きな乖離はなかった。

(13)あなたの指導の方針をおしえてください　(複数回答可)

ア　競技をやるからには強いチーム、団員を育てること　402 名
イ　競技の向上より、幅広いスポーツ体験をさせること　168 名
ウ　競技はまあまあでよいから、体力向上に力を入れる　134 名
エ　小学生のスポーツ活動なので遊びを中心にしている　68 名
オ　礼儀を生活の中で重視している　592 名
カ　その他　196 名

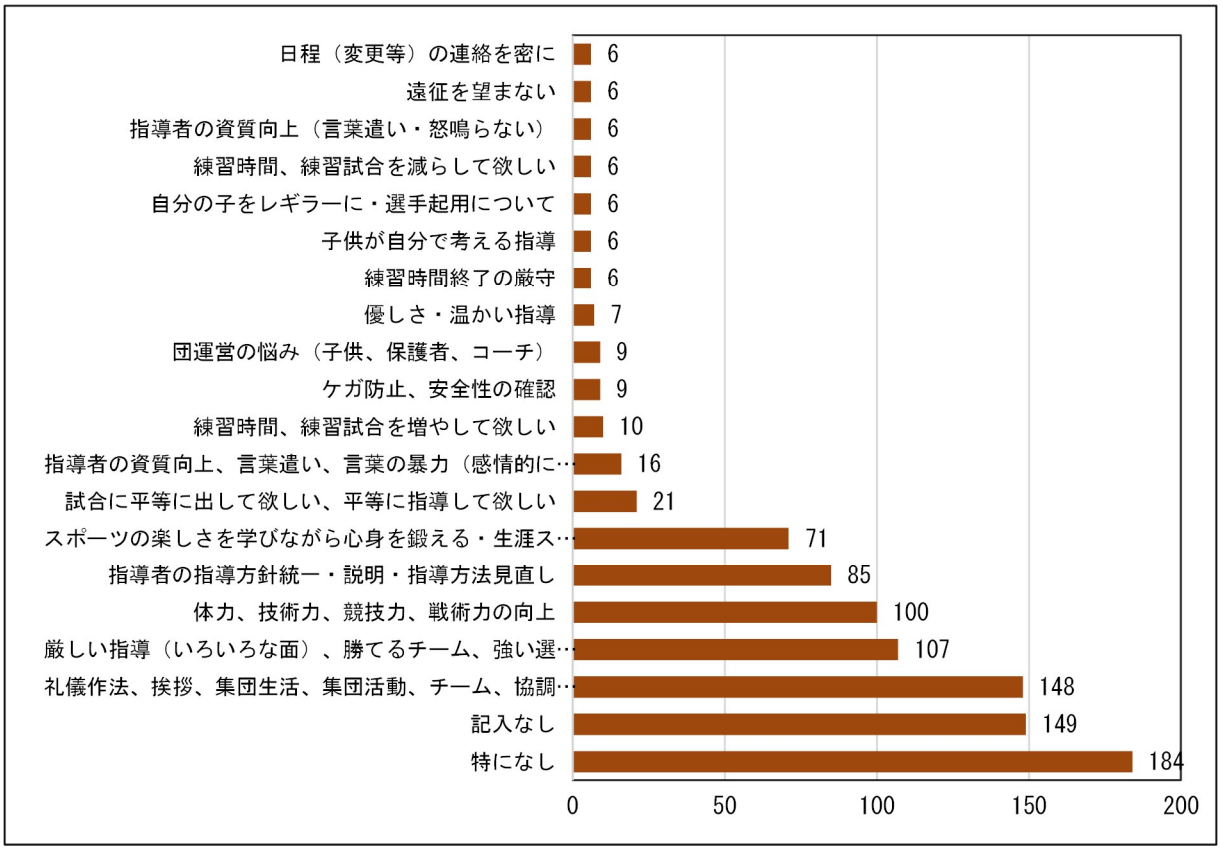


「オ」の礼儀を生活の中で大切にしているが圧倒的に多く、次いで「ア」の競技をやるからには強いチーム、強い団員を育てることが入っている。
複数回答で、強さと礼儀に回答が集まった様子がうかがえる。

(14)母集団(保護者)から指導に関してどのような要望を受けているか(自由記述)

記述のある回答のうち、特になしが最も多く、次いで礼儀作法、マナー、協調性など人間形成にかかわる要望が、次いで厳しい指導、強い選手の育成、勝てるチーム作りといった要望があった。

この他にも保護者からは多種多様な要望が寄せられているが、家庭で担うべき躾から、技術、体力の向上、さらには人間力の形成までもが求められている様子が浮き彫りになった。

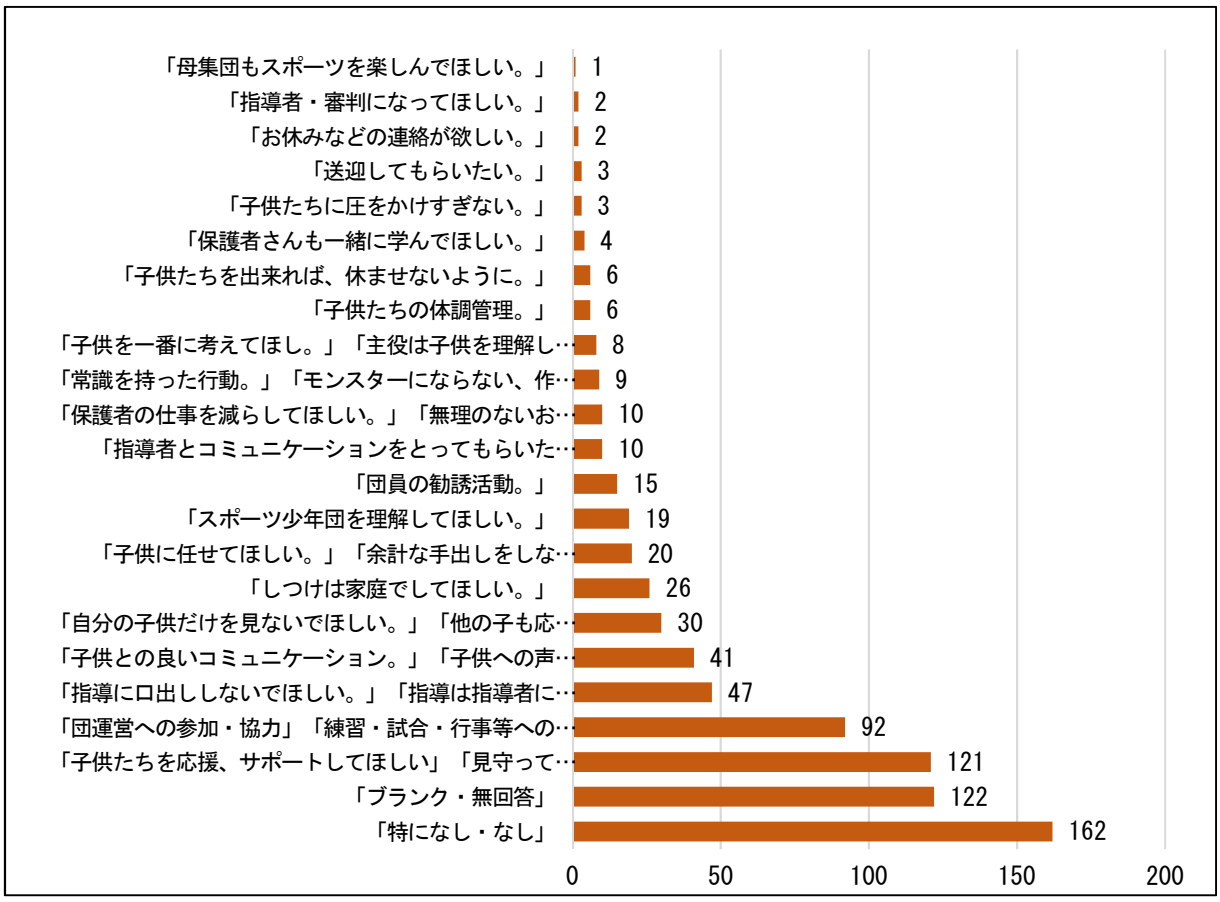


【(14)母集団(保護者)から指導に関してどのような要望を受けているか】

(15)母集団(保護者)への要望はあるか　(自由記述)

記述のある回答のうち、練習を見に来てほしい、子ども達の頑張りを見て応援・協力してほしいという内容が一番多くある一方で、指導への口出しや、我が子に手をかけすぎるのは困るといった声もあった。また、スポーツ少年団を理解してほしい、躾は家庭でしてほしいといったものもあった。

ただし、特に要望がないと回答した人、無回答も多かったことから、概ねは、保護者と良好な関係が築けているものととらえることもできる。



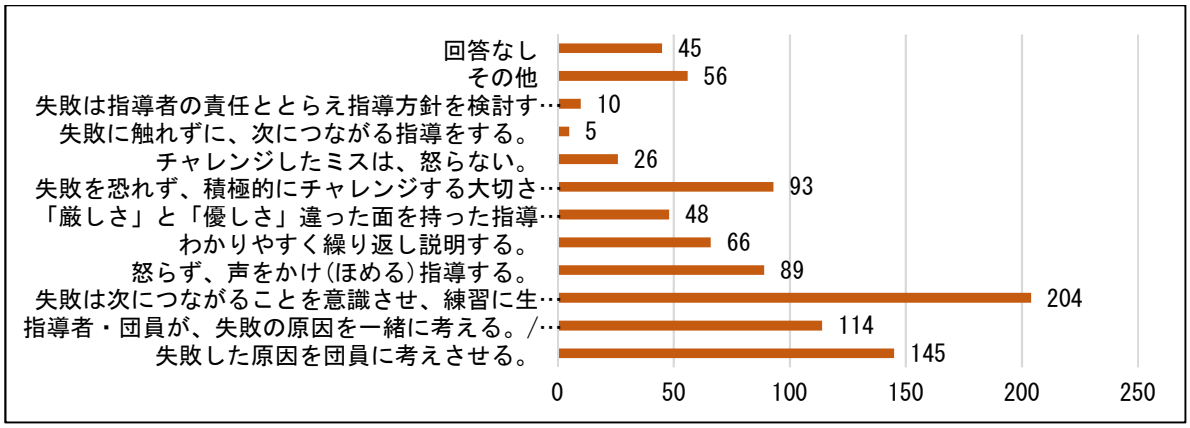
【(15)母集団(保護者)への要望はあるか】

(16)団員が練習・試合で失敗をした時、どのような対応をこころがけているか

(自由記述)

まずは本人に考えさせ、その後に、しっかり説明やフォローを行い、ふたたびチャレンジできるようにもっていく、失敗をプラスに転換できるように導くといった回答が多くを占めた。

失敗を恐れて消極的なプレーをするようになってはマイナスでしかない。積極的なトライは褒めるが、怠慢なプレーや集中力を欠いたために起きたミスは、厳しい態度で指導していることがうかがえた。

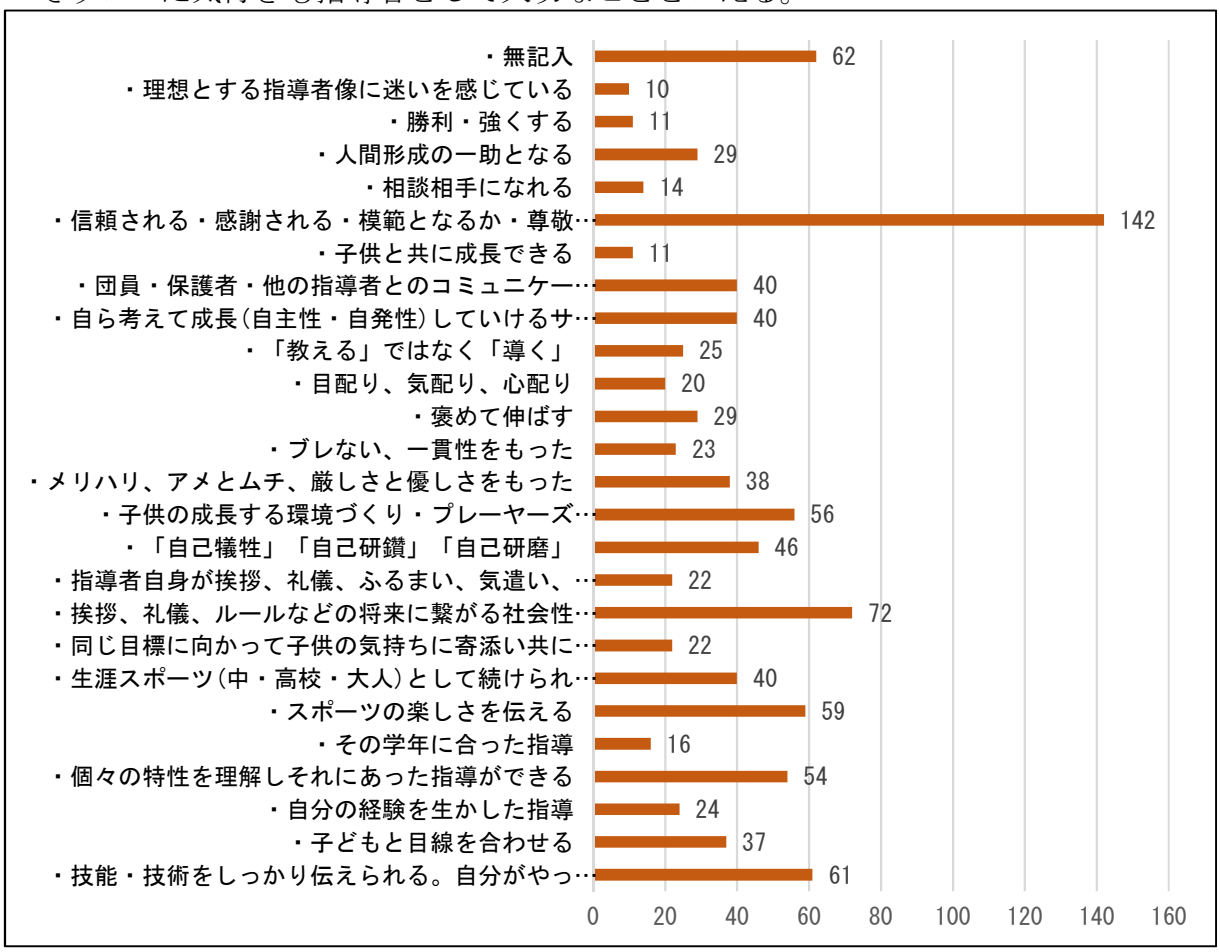


【(16)団員が練習・試合で失敗をした時、どのような対応をこころがけている

(17)理想とする指導者とは　　（自由記述）

競技の技能・技術を正確にわかりやすく伝え、勝敗にこだわり過ぎない。自身の資質を理解し、自己研鑽し資質の向上に努めるとともに、子どもたちにスポーツの楽しさを体感させ、生涯スポーツにつなげることができる。さらに、一人の人間として、社会性とコミュニケーションスキルを備え、団員、保護者から信頼が得られるという理想像を持っていることがわかった。

また、一部では、理想像をとらえきれていない、迷いがあるとした回答もあったが、そういった気付きも指導者として大切なことといえる。

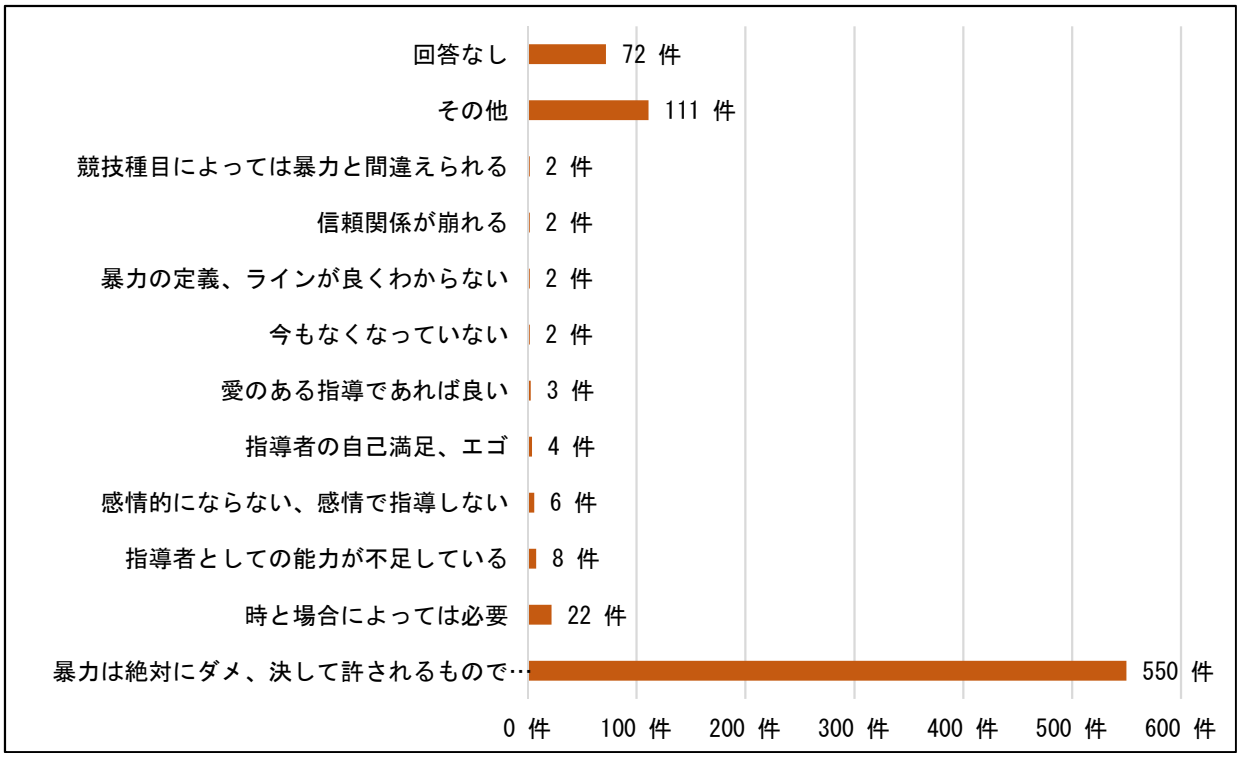


【(17)理想とする指導者とは】

(18)スポーツ現場における暴力・暴言等についての考え　（自由記述）

圧倒的に「暴力・暴言とも決して許さるものではない」という回答だが、次いで「時と場合によっては必要」「愛のある指導なら良い」「叱咤激励は良い」とするブレを感じる回答があった。

また、どこからが暴力・暴言なのか定義がわからないという迷いも見受けられた。頭では理解していても、自身の指導環境に重ねた時、暴力・暴言、全てのハラスメントに対しＮＯと言い切れていない現状が浮き彫りになったといえる。



【(18)スポーツ現場における暴力・暴言等についての考え】

【アンケートから見えてきたもの】

～　勝利至上主義は指導者だけの問題ではなかった　～

アンケートから、暴力・暴言については、指導者が理性ある時の考え方や、熱が入った時、感情が先にきた時の対応に差が生じていることが見えた。

なぜ、コントロールが効かなくなるのか。そもそも、指導者は、各々に理想とする指導者のイメージを持ち、そこに近づくよう子どもたちと汗していたはずだ。

しかし、現実は違っている。実際の指導現場、環境には、感情が先に立つような場面が往々にしてあるのだろうか。

保護者からは、習い事感覚で子どもを活動に出され、家庭で担うべき躾の部分まで期待される。また、ジェネレーションギャップにより指導者と保護者のコミュニケーションが円滑にいかないという声も聞く。

これには、入団の際、保護者に対して行うべきスポーツ少年団の理念、意義と原則、団の運営方針についての説明が不足しているのではないかと考える。もしかすると、それ以前に、説明できる指導者がその場にいないのかもしれない。団代表又は活動を統治する人間は現場に出てきているだろうか。

指導者の確保については、団員の保護者を指導者として迎えれば、最も活動の機会が約束される。しかし、その一方で、技術指導をするため、ベンチ入りすることを目的とした指導者資格取得にも繋がり、自身の子どもの小学校卒業をきっかけに団を離れる指導者も多い。ここにきて世代交代の難しさが浮き彫りになった形である。

本来、指導者育成とは、各団においてきちんと指導し、意識付けすることが大前提で、団の中で理念・意義・原則と併せ、メンバーシップ制による義務と権利の関係、さらに、各団の方針が承継されるべきである。その上で、機会をとらえた研修など自

己研鑽が資質の向上につながり、指導現場に活きてくるのではないだろうか。
　しかしながら、実際のところ、新たな指導者に向け「スポーツ少年団とは」は伝わっておらず、設立当初より理想として唱える活動と乖離が見られる。
　その一端が勝利至上主義といえるが、勝利至上主義は、決して指導者だけの問題ではなかった。
　保護者から指導者への要望には、厳しい指導、強い選手の育成、勝てるチーム作りが求められている。また、体罰・暴力については、全ての暴力行為に対しＮＯと言い切れない指導者の感情のブレに、保護者の強い要望が重なれば、勝ちにこだわった方向に向く可能性も大いにある。
　スポーツ少年団誕生から五十有余年、今の私たちに求められるのは、原点回帰と時代に合わせた変容ではないだろうか。
　指導者には、研修等の機会が豊富に提供されており、意識の向上とスキルアップが容易な環境下にある。己の糧とするため熱量を持って取り組むことが望ましいが、たとえ義務的な取り組みであっても、自己研鑽という指導者の責務を果たすことに繋がっている。
　その一方で、育成母集団には、研修の機会が少なく、意識を高めていくことは難しい。育成母集団は本来、少年団活動を支える「母体となる集団」であるが、現状としては「保護者会」のような位置づけであることが多いことが伺えた。
　このことから、県本部（市町村本部）が主体となり育成母集団のあるべき姿、活動内容についてなどの研修を開催し、本来の役割を理解し、担ってもらう環境を整える必要がある。そうすることではじめて指導者と育成母集団が両輪となった団運営が実現し、子どものこころとからだを健やかに育む活動が生き活きと展開されるのではないだろうか。
　育成母集団の保護者会化が、原点回帰と時代に合わせた変容の必要性を強く感じさせる。
　このことから、育成母集団の環境整備につながる研修の他、各々の単位団活動を今一度見つめ直すきっかけとなるような仕組みを作ることはできないだろうか。真の意味で子ども達が活動の真ん中にあるように。